

JA魚沼 新之助研究会 北魚沼版「新之助」栽培暦

魚沼農業協同組合

【収量、収量構成要素及び品質の目標】

目標収量	540kg/10a
穂数	380 本/m ²
一穂粒数	70 粒
m ² 当たり粒数	26,600 粒
精玄米粒数歩合	85%
千粒重	24.0 g
整粒歩合	70%以上
玄米タンパク質含有率	5.8% (上限6.3%)

注) 精玄米粒数歩合は玄米1.9 mm以上粒数/全粒数

【生育のめやす（稚苗育苗、5月中旬移植）】

生育ステージ	葉数(葉)	草丈(cm)	茎数(本/m ²)	葉色(SPAD)
最高分けつ期 (7月5日頃)	10.0～11.0	45～50	580～600	35～38
幼穂形成期 (7月20日頃)	11.5～12.5	68～70	510～560	33～36
1回目穂肥時 (7月23日頃)	—	70～72	480～530	33～36
2回目穂肥時 (8月1日頃)	—	—	—	34～36
出穂期 (8月13日頃)	13.5～14.5	稈長78	380	34～36

【品種の特徴】

- 出穂期及び成熟期は「コシヒカリ」に比べ6日及び7日程度遅い晩生のうるち種
- 極良食味で高温耐性が強い
- 草型は偏穂数型
- 耐倒伏性はやや強。穂発芽性は中
- 千粒重はコシヒカリに比べ約1g 重い
- いもち病ほ場抵抗性は、葉いもちがやや弱、穂いもちが弱
- 障害型耐冷性は弱

環境負荷低減の取組

J A魚沼北魚沼新之助研究会 新之助 3割減栽培基準

節減対象農薬使用回数(成分回数)		化学肥料使用量(窒素成分kg/10a)	
慣行基準	3割減基準	慣行基準	3割減基準
19	13	7.5	5.25

※但し、上記基準で対応できない不測の事態が生じた場合は、基準を超える使用等について研究会で協議する。

【主な作業と生育ステージ及び管理のポイント】

時期	4月		5月		6月		7月		8月		9月	
	20		10	20	10	20	10	20	10	20	10	20
主な作業と生育ステージ	播種		田植え		中干し (適期から遅れず実施)		最高分けつ期	幼穂形成期 穂肥	出穂 穂肥	通水最終日に十分かん水		収穫成熟期 (落水は出穂25日後以降)

ほ場選定と基肥施用

- ・大豆跡やほ場整備直後のほ場、秋落ちしやすいほ場での作付けは避ける。
- ・日照条件の良いほ場を選定し、日照ムラのあるほ場の作付けは避ける。
- ・土壌診断に基づき、土づくりを行う。
- ・基肥は窒素成分で3～3.5kg/10aをめやすとし地力に応じて加減する。
- ・全量基肥は、分施の基肥と穂肥の合計量をめやすとする。

田植え

- ・田植えは5月中旬をめやすに行う。
- ・栽植密度は50株/坪とし、過度な疎植は避ける。
- ・1株苗数は3～4本をめやすとする。

中干し・溝切り

- ・中干しは、遅くとも田植え1か月後をめやすに目標穂数の80%を確保したら直ちに開始し、出穂期1か月前までに終了する。
- ・溝切りは、中干しの効果を高めるため、必ず実施する。

病虫害防除

- ・葉いもち防除は、育苗箱施用により必ず行う。また、予防防除を行っても葉いもちを十分に抑えられない場合は、追加防除を行う。
- ・穂いもち防除は必ず行い、特に、葉いもちの発生が多い場合には防除回数を2回とする。
- ・斑点米カメムシ類防除は、畦畔等の草刈りと加害種に応じた薬剤防除を行う。
- ・その他病虫害も予防防除や発生に応じた薬剤防除を適宜行う。

穂肥施用と登熟期の水管理

- ・穂肥は窒素成分で合計2～3kg/10aをめやすとする。
- ・幼穂長が5～10mmとなる、出穂期21～18日前と12～10日前の2回に分けて施用する。
- ・異常高温等で栄養凋落が予想される場合は、窒素成分で最大で1kg/10a以内の追肥(3回目穂肥)を検討する。
- ・出穂期25日後までは飽水管理とし、通水最終日には十分かん水する。

収穫・乾燥・調製

- ・収穫適期は黄化粒割合が85～90%になった頃であり、積算温度1,050～1,100℃程度をめやすとする。
- ・乾燥は、粒水分が14%以上、15%以下となるよう、余裕を持って仕上げる。胴割粒の発生を防止するため、粒水分を確認し適正温度及び適正速度で行い、急激に乾燥させない。
- ・篩い目は2.0mmを使用し、色彩選別機による調製を行う。(持ち帰り検査も同様)
- ・調製後は玄米水分の変化に留意し保管する。

GAPの取組

北魚沼地区新之助はJGAP認証取得農家(当該年において、JGAP認証取得予定の農家を含む)が栽培する。